

『資本論』の沙翁引用：引用先と引用元の一覧

福留，久大
九州大学名誉教授：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1854042>

出版情報：経済学研究. 84 (2/3), pp. 59-78, 2017-09-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

『資本論』の沙翁引用

——引用先と引用元の一覧——

福 留 久 大

- | | |
|-----------------|----------------|
| (1) 沙翁引用の探索の方法 | (4) 邦語文献の沙翁の探索 |
| (2) 『資本論』の沙翁16件 | (5) MEWとMECの探索 |
| (3) 『資本論』の沙翁一覧 | (6) 引用の沙翁の原文一覧 |

沙翁引用の探索の方法

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて心にうつりゆく由なしごとを、そこはかたなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。青少年期の学校教育で学習した古文の一節、例えば徒然草の冒頭の一文を記憶していることは、日本人において特別珍しいことではないだろう。同様に、と言うよりも、質量ともにその幾層倍もの規模で、一九世紀知識人としてのマルクスが例えばシェイクスピア作品のあれこれを暗誦でき、引用できることも、特別に異とすべきことではないのかも知れない。

マルクスによって『資本論』に引用されたシェイクスピア作品が、経済現象の意味合を絶妙の呼吸で解き明かすことが少なくない。そういう観点で、『資本論』の沙翁引用を探索するためにはどういう方法があるか。マルクスがシェイクスピア作品からと明記している場合は何も困難はない。しかし、明記が存在しない場合、とくにシェイクスピア作品そのままでなく多少とも変形して使用している場合、探索は容易ではない。そういう場合を考慮すると、通常の探索方法は、他の古典的作品と同様に、後代の編集者によって整備された「文献索引」「人名索引」に依拠することだろう。独逸語原書としては、Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Kar Marx Friedrich Engels Werke, Band 23. Literaturverzeichnis, Personenverzeichnis (『資本論』第1巻、マルクス・エンゲルス著作集(日本での通称は「全集」)第23巻、文献目録、人名目録)があり、英語訳書としては、Karl Marx, *Capital*, Vol.1, Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 35. Index of Quoted and Mentioned Literature, Name Index. (『資本論』第1巻、マルクス・エンゲルス著作集、第35巻、文献索引、人名索引)が挙げられる。なお、独逸語原書および英語訳書では、『資本論』第2巻第3巻においては、文献目録にも人名目録にも、シェイクスピアの名前と作品は見当たらない。(以下では、独逸語原書、英語訳書として次の二書を使用し、前者をMEW、後者をMECと略記する場合がある。)

Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Kar Marx Friedrich Engels Werke, Band 23. (Dietz Verlag, Berlin,

1962. 18. Auflage 1993.)

Karl Marx, *Capital*, Vol.1, Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 35. (Lawrence & Wishart, London, 1996.)

日本においては、そのような通常の方法に加えて、マルクス『資本論』が引用したシェイクスピア作品の紹介に専念した書物、『資本論』中の全引用文献を対象として論じ、その一部分としてシェイクスピア作品からの引用を紹介した書物が存在する。したがって、まずは、そういう書物の成果に手掛かりを求めることが最適の方法と考えられる。

『資本論』が引用したシェイクスピア作品の紹介に専念した書物として、川上重人(1950-)『シェイクスピアは『資本論』のなかでどう描かれたか』(本の泉社、2001年刊)が挙げられる。同書の場合、シェイクスピア作品の引用句の探索方法について特別の記述は見当たらない。ただ、『『資本論』からの引用は、新日本出版社の上製版(全5冊)に依る』(6頁)という状況から、社会科学研究所・監修、資本論翻訳委員会・訳『資本論』(当初、13分冊の新書版として刊行され、その後さらに彫琢を加えた上製版5冊が1997年に刊行)の註記や訳者の補足に依拠していることが推測される。同訳書は50名を超える研究者が参加して推進された丹念な調査作業の成果であって、川上著書に裨益した所は計り知れないほどに大であったと考えられる。特に、上製版『資本論』5冊(Ia、Ib、II、IIIa、IIIb)と同時に刊行された服部文男・編『資本論総索引』(新日本出版社、1997年刊)は、「新『マルクス/エンゲルス全集』(新メガ)、ヴェルケ版『資本論』など、種々の索引を参照・検討した」集大成的労作であって、『資本論』「文献索引」「人名索引」として現状では最も信頼に値するものと考えられる。

川上著書とは対照的に、『資本論』中の全引用文献を対象として論じ、その一部分として、シェイクスピア作品からの引用に言及しているのが、江夏美千穂(1916-2004)『『資本論』中の引用文献にかんする研究』(第三出版、2003年刊)である。同書は、『資本論』引用文献の探索に当って『新メガ』の重要性を次のように強調している。「ソ連邦と東ドイツとのマルクス=レーニン主義研究所は1974年に、『新メガ(新マルクス=エンゲルス全集)』の刊行を開始した」(24頁)。「『新メガ』では『旧メガ』では欠落していたマルクス直筆の『資本論』が次々と覆刻・刊行された。すなわち、『初版』が“II/5”の巻として1983年に、『第二版』が“II/6”の巻として1987年に、『フランス語版』が“II/7”の巻として1989年に」(25頁)。「『新メガ』の“II/5”や“II/6”や“II/7”の偉業はたんにこれだけではない。もう一つの偉業として、上記の「覆刻〈本文〉分冊」とは独立に、“Apparat”(『書誌学』上の〈本文〉分冊研究資料)分冊がおさめられた。この“Apparat”中の「解説」では、『資本論』中の引用文献ならびに引用句が丹念に探索・検証されており、しかも驚くことに、各版『資本論』ではその典拠が全く示されていない分にまで探索・検証が及んでいる」(26頁)。

江夏氏は、『K・マルクス、初版資本論』(幻燈社書店、1983年刊)、『K・マルクス、第二版資本論』(幻燈社書店、1985年刊)の訳者であり、『K・マルクス、フランス語版資本論、上下巻』(法政大学出版局、1979年刊)の共訳者(他の訳者は上杉聡彦氏)である。江夏著書には、この訳業の過程で気付

いた『フランス語版資本論』への沙翁引用が含まれている。また、江夏著書においては、『資本論』からの引用は、これらの訳書に基づいて示されている。

『資本論』の沙翁16件

服部編『資本論総索引』、それに基く川上著書、『新メガ』等に依る江夏著書、これら邦語文献は、いわば網羅主義で、『資本論』に登場するシェイクスピア作品の台詞、登場人物、シェイクスピアという人名、そういう関連事項を片言隻句まで拾い上げる傾向がある。それに対して『資本論』の独逸語原書 MEW と英語訳書 MEC の場合には、いわば重点主義と言うべく、シェイクスピア劇の台詞を軸に文献目録を編集している。当然の結果、邦語文献の示している引用件数が数において上まわり、MEW と MEC の収録する事項はすべて邦語文献の目録に共通に含まれる結果になっている。

ただし、1 件だけ例外がある。邦語文献も MEW も見逃したシェイクスピア作品の引用を MEC が拾い上げている。独逸語原文で〈Und nun: In einer beßren Welt wünsch' ich mir mehr von eurem werten Umgang, Addio! (では、あの世でもっとお付き合いを深めよう。さようなら)〉(MEW, S.242-243.) という一文を、英語訳書は〈And now, gentlemen, "farewell, and may we meet again in yonder better world, but not before"〉(MEC, p.237) と訳して、〈These are paraphrased lines from Shakespeare's *As You Like It*, Act 1, Scene 2〉(p.778) という註記を付している。この MEC が見出した引用文を、邦語文献が収録したものに加えると、次の15件の沙翁引用が『資本論』に含まれている、と言えよう。

さらに、片言隻句まで追い求める日本式網羅主義に従えば、邦語文献も指摘していない〈Dies Shylocksche Festklammern. (シャイロック的固執)〉(S.304)、〈Das Shylocksche Gesetz. (シャイロック的法律)〉(S.304) の存在に気付く。この「シャイロック的固執」「シャイロック的法律」を一括、16 件目として加えることができる。

『資本論』の沙翁一覧

以下に、『資本論』に登場するシェイクスピア作品の台詞、登場人物、シェイクスピアという人名、そういう16件の関連事項を次のような要領で整理して示すことにする。12件目までは、服部編『資本論総索引』に基づく川上著書に従って『資本論』第1巻、第3巻に引用されている順に列挙する(出典の表示は、第1巻については頁数のみ、第3巻についてだけⅢを付ける。同書の第1巻は1a、1b の、第3巻は3a、3b の2分冊構成であるが、頁数は各巻ごとの通し番号である)。13件目は、江夏著書が見出した、『フランス語版資本論』への沙翁引用を挙げる。14件目は、服部編『資本論総索引』および MEW の人名索引が拾ったシェイクスピア自身の名前である。15件目、16件目はすぐ上に述べた通りである。

『資本論』邦訳は、主として、社会科学研究所・監修、資本論翻訳委員会・訳『資本論』新日本出版社刊に依る。大きく異なる場合は註記する。対応する独逸語原文は *Das Kapital*, Erster Band, Kar Marx

Friedrich Engels Werke, Band 23. に依って示す。13件目、15件目については、当該個所に原典を表示する。

- ① 『資本論』第1巻、「第四版への序文」（エンゲルス）において。〈彼は、「巧みな攻撃」において、このように身がまえ、このようにその剣の尖をつきつけたが、〉(53頁)。

〈So lag er, und so führt' er seine Klinge, in „meisterhaft gehührtem Angriff“,〉(S.45)。

〈MEW 註記：エンゲルスはここで、ひとりで50人の敵と戦ったと言う法螺吹きで臆病者のフォールスタッフの台詞を言い換えている。(シェイクスピア『ヘンリー四世』第1部第2幕第4場)〉(S.847)。

- ② 第1巻第1篇「商品と貨幣」第1章「商品」第3節「価値形態または交換価値」において。〈商品の価値対象性は、どうつかまえたらいいかかわからないことによって、寡婦のクイックリーと区別される。〉(81頁)。

〈Die Wertgegenständlichkeit der Waren unterscheidet sich dadurch von der Wittib Hurtig, daß man nicht weiß, wo sie zu haben ist.〉(S.62)。

〈上製版註記：クイックリーは、シェイクスピアの下記の作品に登場する安酒場の女将。(シェイクスピア『ヘンリー四世』第1部第3幕第3場)〉(81頁)(S.848)。

- ③ 同章第4節「商品の物神的性格とその秘密」において。〈ここでは、あのお人よしのドッグベリーを思い出さない人があろうか。彼は夜番のシーコウルに教えて語る—『容貌の良いのは境遇の賜物だが、読み書きは自然にそなわるものだ。』〉(142頁)。

〈Wer erinnert sich hier nicht des guten Dogberry, der den Nachtwächter Seacoal belehrt; „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“〉(S.98)。

〈上製版註記：ドッグベリーはこの劇に登場する警察官で、始終、言葉を誤用する。(シェイクスピア『から騒ぎ』第3幕第3場)〉(142頁)(S.848)。

〈福留註記：上製版142頁では、「男ぶりのいいのは運の賜物」と訳している。シェイクスピアの原文〈to be a well-favoured man is the gift of fortune; but to write and read comes by nature.〉の前半部分に含まれる〈the gift of fortune〉を重視して「運の賜物」とした結果だと考えられる。しかし、マルクスは〈fortune〉(運)を〈Umstände〉(境遇)に置き換えて、〈Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände,〉と翻訳している。マルクスに即して「境遇の賜物」という訳語に修正した。いまひとつ、「男ぶり」を次の理由で「容貌」に変更した。日本語の「男ぶり」には、「男子としての器量・面目」という「立ち居振る舞い」など内面を形容するものと、「美男・男前」という「容貌」など外面を表現するものと、両義がある。シェイクスピアの原文〈a well-favoured man〉について、〈favoured〉(好意・好感を持たれている)の意味を考えると、内面の優れた様子を表して「立ち居振る舞いの立派な男」とも思われる。そうすると、ドッグベリーは「立

ち居振る舞いの立派なのは運の賜、読み書きは自然に具わるもの」と、前半も後半も実際とは逆を言っていることになる。「始終、言葉を誤用する」役柄に適しているとも考えられる。しかし、〈well-favoured〉の意味は独特で、田島松二教授（英語学）の教示によると、「シェイクスピア関係の用語辞典や権威ある歴史的大辞典 Oxford English Dictionary (OED) を調べても、〈handsome or attractive in appearance, good-looking〉つまり、容貌の良さの意味に限られている。現今の内外の辞書もすべてこの意味だけを記載している。立ち居振る舞いの良さについては、シェイクスピアは〈well-bred〉を使っているようです」とのことである。この点を明瞭に示すために、「男ぶり」を止めて、外面的特徴を指す「容貌」を訳語として採用した。なお、マルクスは〈a well-favoured man〉を〈ein gut aussehender Mann〉（容貌の良い男）と訳しているので、問題は残らない。

シェイクスピアの場合、「容貌の良いのは運の賜、読み書きは自然に具わるもの」となって、前半は実際のこと、後半が実際と逆のことを表す台詞になっている。「始終、言葉を誤用する」特色が半分ほど描き出されている。マルクスの場合、「容貌の良いのは境遇の賜、読み書きは自然に具わるもの」と、ドッグベリーは前半後半共に実際と逆のことを口走るわけで、「始終、言葉を誤用する」特色が十分に描き出されている。〉

- ④ 第3章「貨幣あるいは商品流通」第2節「流通手段」(a)「商品の変態」において。〈商品は貨幣を恋慕うが、「まことの恋が平穏無事に進んだためしはない。」〉(182頁)。

〈Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth“。〉(S.122)。

〈MEW 註記： „der Weg wahrer Liebe ist niemals eben“ (シェイクスピア『夏の夜の夢』第1幕第1場)〉(S.849)。

〈福留註記：シェイクスピア作品からの引用は、この個所だけ独逸語翻訳でなく、英文のまま引用されている。しかし、シェイクスピアの原文は、“The course of true love never did run smooth;” と過去形になっている。これを、マルクスが1867年の『資本論』初版で、“the course of true love runs never smooth”. と現在形に変えて引用した。1872年再版、1883年三版までそのまま続いた。1890年刊行のエンゲルス編集の第四版で現行の形に語順を変えられた。引用符号がドイツ語文では „□“、英語文では “□” となる。ただし、ドイツ語文献のなかの英文の場合、ドイツ語方式である。〉

- ⑤ 同章第3節「貨幣」(a)「蓄蔵貨幣」において。「貨幣においては諸商品のあらゆる質的区別が消え去っているように、貨幣は貨幣でまた、徹底的な水平派として、あらゆる区別を消し去る」という本文文言に次のような註記(91)が添えられる。

〈「金か！ 黄金色にきらきら輝く貴重な金貨だな！

これだけの金があれば、黒を白に、醜を美に、

邪を正に、卑賤を高貴に、老いを若さに、

臆病を勇気に変えることもできよう。

…神々よ、どうということだ、これは？ 神々よ、どうしてこれを？

これはあなたがたのそばから神官や信者たちを引き離し、
 まだ大丈夫という病人の頭から枕を引きはがす代物だ。
 この黄金色の奴隷めは、信仰の問題でも
 人々を結合させたり離反させたりし、
 呪われたやつらを祝福し、白癩（びゃくらい）病みを崇拜させ、
 盗賊を立身させて、元老院議員なみの爵位や権威や栄誉を与えるやつなのだ。
 枯れしぼんだ古後家を再婚させるのもこいつだ、
 …やい、罰当たりな土くれ、
 売女（ばいた）め」シェイクスピア『アテネのタイモン』》（222～223頁）。
 〈„Gold! kostbar, flimmernd, rotes Gold!
 Soviel hievon, macht schwarz weiß, häßlich schön;
 Schlecht gut, alt jung, feig tapfer, niedrig edel.
 ...Ihr Götter! warum dies? warum dies, Götter;
 Ha! dies lockt Euch den Priester vom Altar;
 Reißt Halbgenes'nen weg das Schlummerkissen;
 Ja dieser rote Sklave löst und bindet
 Geweihte Bande; segnet den Verfluchten;
 Er macht den Aussatz lieblich; ehrt den Dieb,
 Und gibt ihm Rang, gebeugtes Knie und Einfluß
 Im Rat der Senatoren; dieser führt
 Der überjäh'rigen Witwe Freier zu;
 ...Verdammt Metall,
 Gemeine Hure du der Menschen.“

（Shakespeare, „Timon of Athens“.）（S.146）。

〈福留註記：マルクスは、シェイクスピア劇の台詞は独逸語翻訳し、作品名のみは英語そのままでも引用している。〉

- ⑥ 第2篇第4章「貨幣の資本への転化」第3節「労働力の購買と販売」において。〈人間は、世界という舞台に現れた最初の日と同じように、いまなお毎日、彼が生産する以前にもその途中でも消費しなければならない。〉（288頁）。

〈und wie am ersten Tage seiner Erscheinung auf der Erdbühne, muß der Mensch noch jeden Tag konsumieren, bevor und während er produziert.〉（S.183）。

〈上製版註記：「世界という舞台」について、シェイクスピア『お気に召すまま』第2幕第7場参照。〉（289頁）。

〈川上註記：「世界という舞台」について、シェイクスピア『お気に召すまま』第2幕第7場の次

の台詞に由来する。「この世界はすべてこれ一つの舞台、人間は男女を問わずすべてこれ役者に過ぎぬ、それぞれ舞台に登場してはまた退場していく。」(64-65頁)。

〈福留註記：MEW および MEC にはこの個所についての註記はない。〉

- ⑦ 第3篇「絶対的剰余価値の生産」第8章「労働日」第5節「標準労働日のための闘争、14世紀中葉から17世紀末までの労働日延長のための強制法」のなかの註記(121)において。「労働者に対する非難攻撃者のなかで最も激怒しているのは、本文で挙げた『工業および商業にかんする一論。租税に関する諸考察を含む。ロンドン、1770年』の匿名の著者である。それ以前、彼の著書『租税に関する考察、ロンドン、1765年』のなかですでにそうであった」という文言に次の一文が続く。〈話しにならぬほどひどい統計のおしゃべり屋であるポロウニアス・アーサー・ヤングも同じ方向を追っていく。〉(472頁)。

〈Auch Polonius Arthur Young, der unsägliche statistische Schwätzer, folgt in dieselben Linie.〉(S.290)。

〈上製版註記：ポロウニアスはシェイクスピア『ハムレット』に登場するおしゃべりな侍従長。〉(472頁)。

〈福留註記：MEW および MEC にはこの個所について何らの指摘も無い。〉

- ⑧ 同章第6節「標準労働日のための闘争、労働時間の法律に基づく強制的制限、1833～64年のイギリスの工場立法」において。「最近、機械を10時間以上稼働させたいという工場主の渴望の結果、イギリスでは8歳から13歳の男女の児童たちを、青少年と婦人たちがすべて工場から退出した後に、もっぱら成年男子と一緒に晩の8時半まで仕事をさせるという慣行が忍び込んできたことがはっきりと認められる。労働者と工場監督官たちは、衛生学および道徳的な理由から抗議した」という文章に、次の一文が続く。〈しかし、資本は答えて言った。「罪はこの身で引き受けるまで！手前の望みはお裁判（さばき）、証文通りの違背金をお願い申しておるんです」。〉(495～496頁)。

〈Aber das Kapital antwortete:

„Meine Taten auf mein Haupt! Mein Recht verlang' ich!

Die Buße und Verpfändung meines Scheins!“〉(S.304)。

〈註記：シェイクスピア『ヴェニスの商人』第4幕第1場での高利貸シャイロックの台詞。〉(497頁、S.854、p.783)。

- ⑨ 同章同節において。「資本のずる賢い目は、1844年の工場法が、元気回復のため少なくとも30分の休憩なしには午前中の5時間の労働を許していないが、しかし午後の労働についてはこの種のことを何も規定していないことを発見した。それゆえ、資本は、8歳の働く児童を2時から晩の8時半まで休みなしに苦役させるだけでなく、ひもじくもさせるという楽しみを要求し、かつ、むりやり獲得した！」という文章に続く台詞。〈「さよう、その胸だ。ちゃんとそう証文にある」。〉(496頁)。

〈„Ja, die Brust.

So sagt der Schein.“〉(S.304)。

〈註記：『ヴェニスの商人』第4幕第1場での高利貸シャイロックの台詞。〉(496頁、S.854、p.783)。

- ⑩ 第4篇「相対的剰余価値の生産」第13章「機械と大工業」第4節「工場」において。1866年、シェフィールドで、工場主と労働者との間と紛争の結果、労働者は告訴され、極めて過酷な判決が下された。その判決についてマルクスの次のように述べた。〈この判決は、「偉大な無給者」である地方のドッグベリーたちによってではなく、ロンドンで、最高法廷の一つによって下されたのである。〉(731頁)。

〈Dieses Urteil wurde gefällt nicht von den „Great Unpaid“, provinziellen Dogberries, sondern zu London, von einem der höchsten Gerichtshöfe.〉(S.448)。

〈上製版註記：ドッグベリーは、シェイクスピア『から騒ぎ』に登場する警察官。まぬけな小役人のあだ名として用いられ、ここでは諸州の名士から成る「州治安判事」たちを指している〉(733～734頁)。

〈MEC 註記：Dogberries is a character in Shakespeare's *Much Ado About Nothing*, a personification of the snobbery and stupidity of officialdom.〉(p.790)。

- ⑪ 同章第9節「工場立法（保険条項および教育条項）、イギリスにおける工場立法の一般的適用」において。〈大工業の本性は、労働の変換、機能の流動、労働者の全面的可動性を条件づける。他方、大工業は、その資本主義的形態においては、古い分業をその骨化した分立性ととも再生産する。すでに見たように、この絶対的矛盾が、労働者の生活状態のいっさいの平穩、堅固、および安全をなくしてしまい、労働者の手から労働手段とともに絶えず生活手段をたたき落とそうとしており⁽³⁰⁷⁾〉、という本文文言に、マルクスが、註記(307)としてシェイクスピア劇の台詞を添えている。〈「生命をつなぐ財産をお取りになるんじゃ、私の生命をお取りになるのも同じことよ」(シェイクスピア)。〉(836頁)。

〈„Ihr nehmt mein Leben,

Wenn ihr die Mittel nehmt, wodurch ich lebe.“ (Shakespeare)〉(S.511)。

〈註記：シェイクスピア『ヴェニスの商人』第4幕第1場での高利貸シャイロックの台詞〉(S.854)。

- ⑫ 『資本論』第3巻第5篇「利子と企業者利得への利潤の分裂。利子生み資本」第26章「貨幣資本の蓄積、それが利子率に及ぼす影響」において。次のような文脈で使われた悪口雑言「糞溜め貴族(ダングヒル・アリストクラット)」。
- 〈富は奢侈の原因であったが、奢侈は富に破壊的に作用する。このずる賢いやつめ！この糞溜め貴族である百万長者の「論理」が全イギリスに吹き込んだ尊敬の念以上に、今日のブルジョア世界の痴愚をより良く示しうるものはない。〉(Ⅲ, 730頁)。

〈Reichtum ist die Ursache von Luxus, und Luxus wirkt zerstörend auf die Reichtum. Dieser Pfiffikus!

Der Idiotismus der jetzigen Bürgerwelt kann nicht besser gezeichnet werden als durch den Respekt, den die „Logik“ des Millionärs, dieses dung-hill aristocrat, ganz England einflößte.〉(MEW, Band 25. S.437-438)。

〈上製版註記：「ダングヒル」は糞、こやしの意で、転じて肥溜めやごみ山を指し、相手を口汚くののしる際に使われる。シェイクスピア『ジョン王』第4幕第3場87行に出ている表現〉(Ⅲ. 731頁)。

〈MEW 註記：dieses dung-hill aristocrat=Emporkommlings (成り上り者、成金)〉(S.438)。

〈福留註記：MEW, Band 25に上記の語義説明があるだけで、シェイクスピアに由来するとの指摘はない。MEC, Volume37の該当箇所にも何らの指摘も存在しない。したがって、『ジョン王』の台詞の引用を見出したのは、新日本出版社版資本論翻訳委員会の功績だと言えよう〉。

- ⑬ フランス語版『資本論』第8篇「本源的蓄積」第27章「農村民からの収奪」において。〈17世紀の最後の数年間には、独立農民階級であり、シェイクスピアの「誇り高き農民」であるヨーマンリは、数の上ではまだ借地農業者階級よりも多かった。(江夏美千穂・上杉聰彦・訳『フランス語版資本論』下巻、405頁)〉。

〈Dans les dernières années du dix-septième siècle, la *Yeomanry*, classe de paysans indépendants, la “*Proud Peasantry*” de Shakespeare, dépassait encore en nombre l’état des fermiers. (Le Capital, par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, Entièrement Révisée par L’Auteur.) (P.319)。

〈江夏註記：シェイクスピア『リチャード三世』ならびに『ヘンリー五世』に使用されている表現〉(266頁)。

〈福留註記：独逸語原書では、„Noch in den letzten Dezennien des 17. Jahrhunderts war die Yeomanry, eine unabhängige Bauerschaft, zahlreicher als die Klasse der Pächter.“ (17世紀の最後の数十年間には、独立農民層であるヨーマンリは、数の上ではまだ借地農業者階級よりも数が多かった) (S.750) となっている。フランス語版では、二つの点で変更が生じている。第一に、「数十年」が「数年」に変わっている。第二に、「シェイクスピアの誇り高き農民」が加えられた。この二つの変更が、マルクス自身に依るのか、訳者によるのか、明らかにする力は、残念ながら現在の筆者には恵まれていない。江夏著書には出典作品の指摘のみで引用元の指摘は無い。したがって、一字ずつ丹念に読み進めて該当箇所を推定するしか探索方法は無いことになる〉。

- ⑭ 第7篇「資本の蓄積過程」第24章「いわゆる原始的蓄積」第4節「資本家的借地農業者の生成」において。16世紀の貨幣価値の低下について註記(228)が加えられ、そこでマルクスは、次のような形でシェイクスピアの名前に言及している。〈16世紀における貨幣の減価が社会の様々な階級に及ぼした影響については、『現在におけるわが国各界人のある種の一般的不平にかんする簡単な検討。W・Sという頭文字のジェントルマン著』(ロンドン、1581年)を見よ。この著作是对話体で書かれていたために、久しくシェイクスピアの著とされ、1751年には彼の名で新版が刊行された。〉(1268頁)。

〈Über den Einfluß der Depreziation des Geldes im 16. Jahrhundert auf verschiedene Klassen der Gesellschaft: „A Compendious or Briefe Examination of Certayne Ordinary Complaints of Diverse of our Countrymen in these our Days, By W. S., Gentleman“, (London,1581). Die Dialogform dieser Schrift trug dazu bei, daß man sie lange Shakespeare zuschrieb und noch 1751 unter seinem Namen neu herausgab.〉(S.771-772)。

〈福留註記：MEC では、“see *A Compendious or Briefe Examination of Certayne Ordinary Complaints of Divers of our Countrymen in these our Days*, By W. S., Gentleman. (London,1581.) The dialogue form of this work led people for a long time to ascribe it to Shakespeare, and even in 1751, it was published under his name.” (p.732) と、シェイクスピアに言及しつつ、人名索引において指摘は行われていない。「わが国各界人」を表す語が、MEW では Diverse of our Countrymen, MEC では Divers of our Countrymen と記されている。Diverse と Divers の違いだが、双方ともに形容詞として存在している。実際の『……一般的不平にかんする簡単な検討』にあつては、1581年版も1751年版も divers of our countrymen となっている。MEW において誤記が生じていることになる。著者が、1581年版で W. S., Gentleman となっているのが、1751年版で William Shakespeare, gentleman に変えられている。〉

- ⑮ 『資本論』第1巻第3篇「絶対的剰余価値の生産」第7章「剰余価値率」第3節「シーニアの『最後の1時間』」において。〈いつか諸君の「最後のとき」が現実にやってくる時、オックスフォードの教授のことを思いたまえ。では、あの世でもっとお付き合いを深めよう。“さようなら！”——と〉(389頁)。

〈Wenn einmal euer „letztes Stündlein“ wirklich schlägt, denkt an den Professor von Oxford. Und nun: In einer beßren Welt wünsch' ich mir mehr von eurem Umgang. Addio!〉(S.242-243)。

〈福留註記：MEC では、Whenever *your* “last hour” strikes in earnest, think of the Oxford Professor. And now, gentlemen, “farewell, and may we meet again in yonder better world, but not before” (MEC, p.237) と訳して、〈These are paraphrased lines from Shakespeare’s *As You Like It*, Act 1, Scene 2 (シェイクスピア『お気に召すまま』第1幕第2場の台詞を意識している)〉(p.778) という註記を付している。(Karl Marx: *Capital*, Vol.1. Karl Marx Frederick Engels Collected Works. Volume 35. p.237, p.778)。確かに、『お気に召すまま』第1幕第2場に 〈Sir, fare you well: Hereafter, in a better world than this, I shall desire more love and knowledge of you.〉という台詞があつて、両者間に明確な類似性を認めることができる。「シーニアの『最後の1時間』」のこの部分に、シェイクスピア作品の引用の存在を看破したのは、MEC 編集委員会の慧眼に依ると言えよう。邦語文献も MEW も気付かなかった個所である〉。

- ⑯ 『資本論』第1巻第3篇「絶対的剰余価値の生産」第8章「労働日」第6節「標準労働日のための闘争、労働時間の法律に基づく強制的制限、1833～64年のイギリスの工場立法」において。先に⑨として示したシャイロックの台詞、〈「さよう、その胸だ。ちゃんとそう証文にある」⁽¹⁵²⁾〉にマ

ルクスの原註(152)が添えられ、その註記のなかで、マルクスは「ローマの貴族たち」を巡って、「彼らが平民の債務者に前貸した貨幣は、債務者の生活諸手段を通じて、債務者の血と肉とに転化した。この『血』と『肉』は『彼ら貴族たちの貨幣』であった」と述べたあと、次の一句を記している。〈十銅板表のシャイロック的な法律はここに由来する!〉。〈Daher das Shylocksche Gesetz der 10 Tafeln!〉(497頁)(S.304)。

さらに、「さよう、その胸だ。ちゃんとそう証文にある」という台詞にすぐ続く本文で、「児童労働を規制する限りで〈1844年の法律の文字に対するシャイロック的固執(Dies Shylocksche Festklammern am Buchstaben des Gesetzes von 1844)〉は、同じ法律が『少年と婦人』の労働を規制する限りでは、これに対する公然の反逆を媒介することになった」(497～498頁)(S.304)事情について述べている。

邦語文献の沙翁の探索

事柄の順序は逆になるが、上記16件の沙翁関連事項が明らかになる経緯を述べておく。

川上重人『シェイクスピアは『資本論』のなかでどう描かれたか』(本の泉社、2001年刊)は、『資本論』に登場する順番にシェイクスピアの8作品を取りあげ、次のように全8章の章名が作品名を兼ねる形で、12件の引用を検討している。「第1章・ヘンリー四世第一部」(2件引用)(13頁～)。「第2章・から騒ぎ」(2件引用)(23頁～)。「第3章・夏の夜の夢」(1件引用)(35頁～)。「第4章・アテネのタイモン」(1件引用)(45頁～)。「第5章・お気に召すまま」(1件引用)(62頁～)。「第6章・ハムレット」(1件引用)(71頁～)。「第7章・ヴェニスの商人」(3件引用)(96頁～)。「第8章・ジョン王」(1件引用)(117頁～)。全8章の前後に「はじめに」(7頁～)と「おわりに」(129頁～141頁)が配置される。各章ごとに(一)『資本論』何篇何章何節にシェイクスピア作品が引用されているかが前記上製版『資本論』に即して示され、(二)その引用部分について何幕何場からと記され、引用部分を中心に当該シェイクスピア作品の梗概が紹介され、(三)引用文との関係で該当する経済事象の意味が解説される。

改めて川上著書の説明に基づいて、各章ごとに『資本論』におけるシェイクスピア作品について登場順に番号を付し、その引用箇所を新日本出版社刊行の上製版に基いて示し、MEWの対応する頁(=Seite)数を調べて列挙すると、以下のようになる。

「第1章・ヘンリー四世第一部」(2件引用)① I 53頁、②81頁。(S.45, S.62.)

「第2章・から騒ぎ」(2件引用)③ I 142頁、⑩731頁。(S.98, S.448.)

「第3章・夏の夜の夢」(1件引用)④ I 182頁。(S.122.)

「第4章・アテネのタイモン」(1件引用)⑤ I 222～223頁。(S.146.)

「第5章・お気に召すまま」(1件引用)⑥ I 288頁。(S.183.)

「第6章・ハムレット」(1件引用)⑦ I 472頁。(S.290.)

「第7章・ヴェニスの商人」(3件引用)⑧ I 495～496頁、⑨496頁、⑪836頁。(S.304, S.304, S.511.)

「第8章・ジョン王」(1件引用) ⑫Ⅲ730頁。(MEW, Band25, S.437-438.)

服部文男・編『資本論総索引』(新日本出版社、1997年刊)の人名索引と文献索引で「シェイクスピア、ウィリアム。Shakespeare, William (1564-1616)」の項目を見ると次のような形で、上製版『資本論』における該当箇所の頁数が記されている。

「人名索引」――

I 53, 81～82, 142, 182, 223, 289, 472, 496, 497, 733, 836, 1268, Ⅲ731。

「文献索引」――

『アテネのタイモン』(Timon of Athens.) I 223。

『ヴェニスの商人』(The merchant of Venice.) I 496, 497, 836。

『お気に召すまま』(As you like it.) I 289。

『から騒ぎ』(Much ado about nothing.) I 142, 733。

『ジョン王』(King John.) Ⅲ731。

『夏の夜の夢』(A midsummer-night's dream.) I 182。

『ハムレット』(Hamlet.) I 472。

『ヘンリー4世』第一部(The first part of Henry the fourth.) I 53, 81～82。

上記の文献索引や人名索引の数字について、双方の頁数を対比すると、人名索引における第1巻1268頁を唯一の例外として、他の12件はそれぞれに対応していることが確認される。例外的存在の1268頁(MEW, Band23において対応する箇所を探すとS.772が該当する)の意味について言えば、シェイクスピア作品の引用ではなくて、シェイクスピアの名前そのものをマルクスが挙げているのである。これについては、後に多少とも詳しく言及する。

また、上記の文献索引や人名索引の数字は、『資本論』にシェイクスピア作品が引用されている箇所の頁数そのものを表示すると言うよりも、その引用表現の出典作品と作者を巡る註記が記された箇所の頁数を表すのが通例である。そのため、引用箇所の頁数と索引の頁数について言えば、双方の頁数が一致する場合と若干の差異が生じる場合がある。その事情を勘案して、索引に挙げられる12件の引用を、先に示した川上著書における引用箇所の表記に対比すると、両者間に対応関係を認めることができる。このことによって、川上著書におけるシェイクスピア作品の探索が服部編『資本論総索引』に依拠していることが判明する。

江夏美千穂『『資本論』中の引用文献にかんする研究』(第三出版、2003年刊)においては、同書の第7章「文芸作品と聖書とギリシャ神話」(262～302頁)が、第1節・文芸作品、第2節・聖書(旧約、新約)、第3節・ギリシャ神話、と分かれている。その第1節が、「(1) W・シェイクスピアの作品」(262～266頁)と「(2) ゲーテの作品」(266～272頁)から構成されていて、前者においてシェイクスピアが取りあげられている。同書でも、『資本論』何篇何章何節にという形で登場する順番にシェイクスピア作品、『ヘンリー四世』(1件引用)、『から騒ぎ』(1件引用)、『真夏の夜の夢』(1件引用)、

『アテネのタイモン』（1件引用）、『ハムレット』（1件引用）、『ヴェニスの商人』（3件引用）、『リチャード三世』および『ヘンリー五世』（合わせて1件引用）が取りあげられている。紙幅の関係で当然にそういう結果になるのだが、引用されたシェイクスピアの8作品が指摘されたうえで、9件の引用文だけが紹介されている。川上著書とは異なって、シェイクスピア作品について引用元の表示や作品の解説は行われず、引用文の意味合の検討も省略に委ねられている。

川上著書および江夏著書が取りあげたシェイクスピア作品を対比すると、『ヘンリー四世』第一部、『から騒ぎ』、『夏の夜の夢』、『アテネのタイモン』、『ハムレット』、『ヴェニスの商人』の6作品が共通している。ただし、『ヘンリー四世』第一部と『から騒ぎ』において、川上著書がそれぞれ1件ずつ多く引用を見出しているので、この6作品について言えば、件数で見ると共通するものは8件で、川上著書にはそれを2件上回る10件が引用されている。

共通せずに相異なる作品は、川上著書で『お気に召すまま』（1件引用）と『ジョン王』（1件引用）があり、江夏著書で『リチャード三世』および『ヘンリー五世』が含まれている。ただ、この『リチャード三世』および『ヘンリー五世』について言えば、それぞれの作品からそれぞれに引用が存在するというのではない。『フランス語版資本論』に着目して、「農村民からの収奪」の章で「シェイクスピアの『誇り高き農民』であるヨーマンリ」を引き出し、⑬「誇り高き農民」の一句が『リチャード三世』と『ヘンリー五世』に含まれていると指摘しただけに留まる（江夏、266頁）。こうして、共通せずに相異なる作品（『お気に召すまま』と『ジョン王』、『リチャード三世』および『ヘンリー五世』）において、3件の引用が認められる。

以上に示したように、服部編『資本論総索引』に基く川上著書と『新メガ』等に依る江夏著書によって指摘された『資本論』の沙翁作品の引用は、合計13件に及ぶ。この13件に加えて、前述した服部編『資本論総索引』1268頁（MEW, Band23においてはS.772）に登場する、⑭沙翁作品ではなく沙翁名自体を14件目として扱うことができる。

この14件のうち、②「クイックリー」、⑦「ボロウニアス」、⑩「ドッグベリー」は、シェイクスピア作品の登場人物の名前、⑭はシェイクスピア自体の名前である。⑥「世界という舞台」、⑫「糞溜め貴族（ダングヒル・アリストクラット）」、⑬「誇り高き農民」は、シェイクスピア劇の台詞のなかの語句である。そのなかで②⑥⑫については、川上著書に出典作品と引用元の指摘があるので、その語句を含む劇の台詞が容易に見出される。⑬については、江夏著書に出典作品の指摘があるだけで引用元の指摘は無いので、一字ずつ読み進んで適当な台詞を見出すほか術がない。結局のところ、引用されているシェイクスピア劇の台詞は、①②③④⑤⑥⑧⑨⑪⑫⑬の残り11件ということになる。そのうち④のみが英語の台詞で、残りは独逸語訳された形で引用されている。①②③⑥⑫⑬は、台詞そのままというより、①はエンゲルスによって、②③⑥⑫⑬はマルクスによって、独逸語に訳されたうえで、多少とも加筆添削による変形が施されている。⑤はシェイクスピア作品から取捨選択の手が加わったうえで、独逸語に翻訳されている。台詞そのものが引用されていると言えるのは、⑧⑨⑪の『ヴェニスの商人』からの三点だけである。

この14件という引用件数は、後述のように独逸語版および英語版『マルクス・エンゲルス著作集』（日本での通称は「全集」）（Karl Marx Friedrich Engels Werke. =MEW）（Karl Marx Frederick Engels Collected Works.=MEC）編集者の指摘する引用件数を上回っている。邦語文献にあっては、シェイクスピア劇の台詞のみならず、台詞のなかの語句、劇の登場人物の名前、シェイクスピア自身の名前まで、網羅主義に従って探索されているからである。

邦語文献によって探索された14件について、該当する独逸語原書 MEW, Band23などの頁数を示すと、次の通りである。① S.45, ② S.62, ③ S.98, ④ S.122, ⑤ S.146, ⑥ S.183, ⑦ S.290, ⑧ S.304, ⑨ S.304, ⑩ S.448, ⑪ S.511, ⑫ MEW, Band25, S.437-438. ⑬ Le Capital, p.319. ⑭ S.772.

なお、川上著書と江夏著書に共通するいま一つの特徴は、マルクス（およびエンゲルス）の独逸語記述やシェイクスピアの英語表現に、ほとんど言及していないことである。

MEW と MEC の探索

以上のように、既存の邦語文献によって探索される『資本論』の沙翁関連事項は14件を数えることになる。

この14という件数の位置づけのために、MEW, Band23の Literaturverzeichnis, Personenverzeichnis 〈文献目録、人名目録〉、MEC, Volume35の Index of Quoted and Mentioned Literature, Name Index 〈文献索引、人名索引〉との比較を試みてみたい。（前述した通り、独逸語原書および英語訳書では、『資本論』第2巻第3巻においては、人名目録にも文献目録にも、シェイクスピアの名前と作品は見当たらない）。

MEW の「文献目録」(Literaturverzeichnis) で引用されているシェイクスピア作品を、「人名目録」(Personenverzeichnis) でシェイクスピアへの言及を探ると、次のようになる。註記に示されている何幕何場という台詞等の出所も併せて記しておく。

Literaturverzeichnis — *Shakespeare, William*

Der Kaufmann von Venedig. (4. Aufzug, 1. Szene.) 304, (4. Aufzug, 1. Szene.) 511.

König Heinrich der Vierte. (1. Teil, 2. Aufzug, 4. Szene.) 45*, (1. Teil, 3. Aufzug, 3. Szene.) 62.

Ein Sommernachtstraum. (1. Aufzug, 1. Szene.) 122.

Timon von Athen. 146**.

Viel Lärm um nichts. (3. Aufzug, 3. Szene.) 98.

『ヴェニスの商人』（第4幕第1場）S.304, (第4幕第1場) S.511.

『ヘンリー四世』（第1部第2幕第4場）S.45*, (第1部第3幕第3場) S.62.

『夏の夜の夢』（第1幕第1場）S.122.

『アテネのタイモン』 S.146**.

『から騒ぎ』（第3幕第3場）S.98.

Personenverzeichnis — *Shakespeare, William* (1564-1616)

146, 511, 772.

〈福留註記：45* について、原典では S.42 だが、誤記につき S.45 と訂正した〉。

〈福留註記：146** について、マルクスによって (Shakespeare, „Timon of Athens“) という註記が付されているだけで、『アテネのタイモン』の何幕何場という引用文の出所に関する編集者の註記はない〉。

MEC の「文献索引」(Index of Quoted and Mentioned Literature) と「人名索引」(Name Index) で引用されているシェイクスピア作品とシェイクスピアへの言及を探ると、次のようになる。比較の便宜のために、対応する個所の頁 (=Seite) 数を添えることにする。

Index of Quoted and Mentioned Literature — *Shakespeare, W.*

As You Like It. (Act1, Scene2) 237. (S.242-243).

King Henry IV, (Part I, Act3, Scene3) 57. (S.62).

The Merchant of Venice, (Act4, Scene1) 292, (Act4, Scene1) 490. (S.304, S.511).

A Midsummer Night's Dream, (Act1, Scene1) 117. (S.122).

Much Ado About Nothing, (Act3, Scene3) 94*, 428**. (S.98, S.448).

Timon of Athens, (Act4, Scene3) 142***. (S.146).

Name Index — *Shakespeare, William* (1564-1616)

94, 117, 142, 292, 490. (S.98, S.122, S.146, S.304, S.511).

〈福留註記：94* について、原典では p.92 だが、誤記につき p.94 と訂正した。142*** について、原典では p.140 だが、誤記につき p.142 と訂正した〉。

〈福留註記：428** について、『から騒ぎ』の登場人物ドッグベリーについて、Dogberries is a character in Shakespeare's *Much Ado About Nothing*, a personification of the snobbery and stupidity of officialdom. (p.790) という編集者註記がある。何幕何場という登場場面の表記はない〉。

独逸語原書 MEW と英語訳書 MEC とについて、文献目録と人名目録の参照を通じて、次のような特色を指摘することができる。

(一) 文献目録においては、『ヘンリー四世』、『から騒ぎ』、『夏の夜の夢』、『アテネのタイモン』、『ヴェニスの商人』の 5 作品が共通に取り上げられ、MEC においてのみ『お気に召すまま』が加わって 6 作品となっている。

(二) 共通の 5 作品のうち、『ヘンリー四世』のなかに MEW は 2 件の引用を見出し、MEC は 1 件のみである。逆に、『から騒ぎ』においては、MEC は 2 件の引用を見出し、MEW は 1 件のみである。残る作品については、MEW と MEC とともに、『夏の夜の夢』(1 件)、『アテネのタイモン』(1 件)、『ヴェニスの商人』(3 件) 同様の引用を探索している。合計の沙翁作品引用件数は、MEW において 8 件、MEC において、『お気に召すまま』の 1 件を加えて 9 件となる。

(三) 人名目録については、MEW において 3 件、MEC において 5 件が挙げられている。MEW の 3 件のうち、〈Timon von Athen, S.146〉〈Der Kaufmann von Venedig, S.511〉の 2 件は、マルクス自身が作者名と作品名を明記したものである。この 2 件は、文献目録にも含まれている。S.772. に関して。マ

ルクスが、『現今におけるわが国各界人のある種の一般的不平に関する簡単な検討。W・S・ジェントルマン著』（ロンドン、1581年）について、〈この書は、対話体で書かれていたために、長い間シェイクスピアの著とされており、1751年にも彼の名前で新版が刊行された。〉という形で、シェイクスピアの名前を記したことに拠る。したがって、この件は文献目録には含まれていないものである。

（四）MECの人名索引5件、p.94, p.117, p.142, p.292, p.490. (S.98, S.122, S.146, S.304, S.511.) に関して。対応する独逸語原書の頁数からわかるように、〈Timon of Athens, p.142〉〈The Merchant of Venice, p.490.〉の2件が、マルクス自身が作者名と作品名を明記したものである。残る p.94, p.117, p.292, は、本文中の作者名ではなくて、作品についての註記のなかの作者名に関わるものである。したがって、この5件はすべて文献索引にも収録されている。ここで注意すべきは、MEWのS.772（MECで言えばp.732）に次のような形で登場するシェイクスピアの名前が拾われていないことである。〈see *A Compendious or Briefe Examination of Certayne Ordinary Complaints of Divers of our Countrymen in these our Days*, By W. S., Gentleman. (London, 1581.) The dialogue form of this work led people for a long time to ascribe it to Shakespeare, and even in 1751, it was published under his name.〉(p.732)

（五）MEWとMECの文献目録・人名目録を包括して、沙翁関連事項の引用は、MEWの場合、文献目録の8件に人名目録独自の1件を加えて9件となる。引用個所の頁数で示すと、次の通りである。S.45, 62, 98, 122, 146, 304, 304, 511, 772。

MECの場合、人名目録の5件はすべて文献目録に含まれているので、引用件数合計は変更なく9件である。該当個所に対応するMEWの頁数で示すと次のようになる。S.62, 98, 122, 146, 242-3, 304, 304, 448, 511。

MEWとMECに共通するのは、7件、S.62, 98, 122, 146, 304, 304, 511。それゆえ、MEWに特有な個所は2件、S.45, 772。MECに特有な個所が2件、S.242-3, 448。したがって、MEWとMECとの探索件数は合計11件となる。列挙すると、S.45, 62, 98, 122, 146, 242-3, 304, 304, 448, 511, 772。

（六）MEWとMECとの探索件数は合計11個所を邦語文献に依り探索された次の14個所と対比する。
① S.45, ② S.62, ③ S.98, ④ S.122, ⑤ S.146, ⑥ S.183, ⑦ S.290, ⑧ S.304, ⑨ S.304, ⑩ S.448, ⑪ S.511, ⑫ MEW, Band25, S.437-438, ⑬ Le Capital, p.319, ⑭ S.772。

邦語文献に独自の探索個所は、⑥「世界という舞台」S.183, ⑦「ポロウニアス」S.290, ⑫「ダンゲヒル」MEW, Band25, S.437-438, ⑬「誇り高き農民」Le Capital, p.319。

逆に邦語文献に欠けているのは、MECに特有なS.242-3（英語訳書ではp.237）である。MEWの独逸語原文で〈Und nun: In einer beßren Welt wunsch' ich mir mehr von eurem Umgang. Addio!（では、また。あの世でもっとお付き合いを深めよう。さようなら!）〉と言う部分を〈And now, gentlemen, "farewell, and may we meet again in yonder better world, but not before"〉と訳して、〈These are paraphrased lines from Shakespeare's *As You Like It*, Act 1, Scene 2（シェイクスピア『お気に召すまま』第1幕第2場の台詞を意識している）〉(p.778) という註記を付している。前節「一覧」において⑮として特筆した所以である。

引用の沙翁の原文一覧

最後に、引用されたシェイクスピア作品の該当箇所を挙げておきたい。ただし、⑦「ポロウニアス」、⑩「ドッグベリー」、⑬「シャイロック」は登場人物の名前、⑭はシェイクスピアの名前であって、台詞ではないので省かれる。したがって、該当箇所を示し得るのは、①②③④⑤⑥⑧⑨⑪⑫⑬⑮の12件である。出典は、シェイクスピア著・坪内逍遙訳『ザ・シェイクスピア——全戯曲（全原文＋全訳）』（第三書館、1989年刊）。

①*Falstaff*. — Thou knowest my old ward; here I lay, and thus I bore my point.

お前（まひ）、俺の得意の防御構（ワード）を知ってるだらう。……ここに斯うおれが構へて斯う、その剣尖（きっさき）を向けた。

（The First Part of King Henry IV, Act 2, Scene 4）。 （161頁）。

②*Falstaff*. — Why, she's neither fish nor flesh; a man knows not where to have her.

だって、魚でもなければ四脚でもない。どう始末していいか分らん代物だからだ。

（The First Part of King Henry IV, Act 3, Scene 3）。 （169頁）。

③*Dogberry*. — ; to be a well-favoured man is the gift of fortune; but to write and read comes by nature.

およそ容貌の善悪は運命の賜であるんちゃが、読むと書くとは自然に具わるんちゃから。

（Much Ado About Nothing, Act 3, Scene 3）。 （487頁）。

④*Lysander*. — Ay! for aught that I could ever read,

Could ever hear by tale or history,

The course of true love never did run smooth;

嗚呼々々！ 書（ほん）を読んでも、

話や歴史で聞いたところでも、

真実（ほんとう）の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい。

（A Midsummer-Night's Dream, Act 1, Scene 1）。 （81頁）。

⑤*Timon*. — Gold? yellow, glittering, precious gold?

Thus much of this will make black white, foul fair,

Wrong right, base noble, old young, coward valiant,

Ha, you gods! Why this? What this, you gods!

Why, this

Will lug your priests and servants from your sides,

Pluck stout men's pillows from below their heads;
 This yellow slave
 Will knit and break religions, bless the accursed,
 Make the hoar leprosy adored, place thieves
 And give them title, knee and appreciation
 With senators on the bench: this is it
 That makes the wappen'd widow wed again;

Come, damned earth,
 Thou common whore of mankind,

黄金（きん）？ 黄色い、ぎらぎらする、貴重な黄金（きん）じゃないか？

こいつが此ッ位ゐありゃ、黒も白に、醜も美に、
 邪も正に、賤も貴に、老も若（にやく）に、怯（けふ）も勇に変へることが出来る。
 え！ 神様たち、何と、どうです？ はい、神様たち、どうです？
 これが此ッ位ゐありゃ、
 神官共だらうが、お傍仕への御家来だらうが、みんな余所へ引ッばってゆかれてしまひますぞ。
 まだ大丈夫といふ病人の頭の下から枕を引ッこぬいてゆきますぞ。
 此黄色い奴めは
 信仰を編み上げもすりゃ引きちぎりもする。
 忌（いま）はしい奴を有りがたい男にもする。白癩（びゃくらい）病みをも拝ませる。
 盗賊（どろぼう）にも地位や爵や膝や名誉を元老並に与へる。
 古後家（ふるごけ）を再縁させるのもこいつだ。

やい、うぬ、罰当たりの土塊（つちくれ）め、
 淫売め。

（Timon of Athens, Act4, Scene3）。 （923頁）。

〈福留註記；最終行の“Thou common whore of mankind”、マルクスの翻訳では、“Gemeine Hure du der Menschen” という部分について。英語の whore、ドイツ語の Hure は「売春婦、淫売」を意味する。多くの『資本論』訳書で、シェイクスピアで言えば、“Thou common ~ of mankind”、マルクスでは、“Gemeine ~ du der Menschen”、つまり、「人間の共通の～」の部分は翻訳されないままである。事柄は、貨幣金に関わるだけに、訳出されてもよいのではないかと考えられる。〉

⑥Jaques. — All the world's a stage,
 And all the men and women merely players:

人間世界は悉く舞台です。

さうしてすべての男女が俳優です。

(As You Like It, Act 2, Scene 7)。 (510頁)。

⑧*Shylock*. — Ay, his breast:

So says the bond.

はい、胸でございます。

さう証書に書いてございます。

(The Merchant of Venice, Act 4, Scene 1)。 (411頁)。

⑨*Shylock*. — My deeds upon my head!

I crave the law. The penalty and forfeit of my bond.

手前が非分（ひぶん）なれば、命をお取り下さい！

手前は正義を要求します。証書通りの科料を要求します。

(The Merchant of Venice, Act 4, Scene 1)。 (411頁)。

⑪*Shylock*. — you take my life

When you do take the means whereby I live.

生活の資本（もとで）を取られるのァ

命を取られるのだ。

(The Merchant of Venice, Act 4, Scene 1)。 (412頁)。

⑫*Bigot*. — Out, dunghill! Darest thou brave a noble?

うぬ、糞堆（こやしだめ）野郎め！ 貴紳に対して無礼を申すか。

(The Life and Death of King John, Act 4, Scene 3)。 (119頁)。

⑬*King Richard*. — Fight, gentlemen of England!

fight, bold yeomen!

奮戦しろ、勇敢なイギリスの武士（さむらひ）ども！

奮戦しろ、勇猛な郷土ども！

(The Tragedy of King Richard III, Act 5, Scene 3)。 (362頁)。

King Henry. — And you, good yeomen,

Whose limbs were made in England, show us here

That mettle of your pasture; let us swear

That you are worth your breeding; which I doubt not;

こら、イングランドで四肢（ふしぶし）を鍛ひあげた郷士たちよ、
牧場仕込の腕力を見せて、さすがに育ち柄だ、とわれわれに断言させろ。
きッと然（さ）う言へるに相違ない。

（The Life of King Henry V, Act 3, Scene 1）。 （219頁）。

⑮ *Le Beau*. — Sir, fare you well:

Hereafter, in a better world than this,

I shall desire more love and knowledge of you.

—— ちゃ、御機嫌よう。

此後、世の中がよくなるやうなことがあったら、
改めて御懇親を結ぶことにしませう。

（As You Like It, Act 1, Scene 2）。 （504頁）。

.....
（追記）フランス語版『資本論』第8篇「本源的蓄積」第27章「農村民からの収奪」における〈シェイクスピアの「誇り高き農民」〉について、再校の校正紙戻し後に、『新メガ（新マルクス＝エンゲルス全集）』Ⅱ/7巻『フランス語版資本論』〈Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA), Zweite Abteilung Band 7, Karl Marx, Le Capital, Paris 1872-1875, Dietz Verlag Berlin 1989〉を閲覧する機会を得た。同書 S.1287 に、引用出典と引用元を明示する次の註記が付されている。「〈*Proud Peasantry*〉 de Shakespeare. Bei Shakespeare: proud yeomanry. William Shakespeare: King Henry V. Act 3, scene 1; derselbe: King Richard III. Act 5, scene 3.」この註記に依ると、『リチャード三世』および『ヘンリー五世』における該当する台詞を容易に探し出すことができる。ただし、同書の閲覧が遅きに失したため、『リチャード三世』および『ヘンリー五世』、それぞれを丹念に閲読する経験をすることができたのは、幸いと言うべきかも知れない。

〔九州大学名誉教授〕